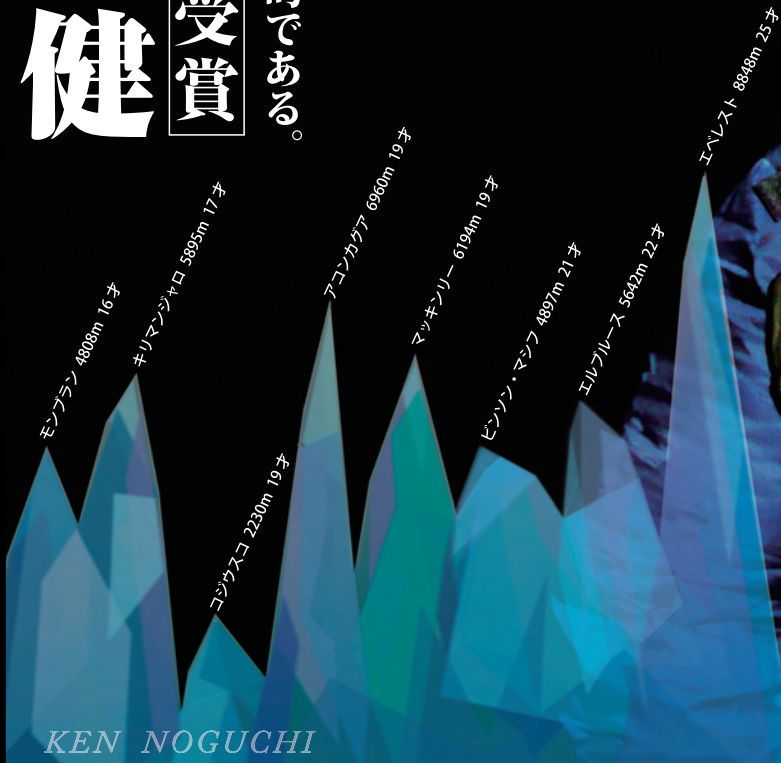


野口健

第2回安吾賞受賞

その突破力は極めて安吾的である。

出でよ、現代の安吾



安吾賞 第2回 授賞式

■記念講演

「安吾さんとの思い出」

半藤 一利 (作家)

■授与式

安吾賞／野口 健 (アルピニスト)

新潟市特別賞／カール・ベンクス (建築デザイナー)

■トークライブ

野口 健

◎ロビー展示

『エベレストのゴミ』

野口健氏が「エベレスト清掃登山」で回収したゴミを特別展示いたします。



【半藤一利】1930年、東京に生まれる。1953年、東京大学文学部卒業。同年、文藝春秋入社、最初の担当が坂口安吾であった。その後、「週刊文春」「文藝春秋」編集長、出版局長、専務取締役などを経て作家となる。1993年「漱石先生ぞな、もし」で新田次郎文学賞、1998年「ノモンハンの夏」で山本七平賞、2004年「昭和史」で毎日出版文化賞特別賞を受賞した。



安吾賞

新潟市ゆかりの作家である坂口安吾は、文学をはじめ多くの分野において何事にも一生懸命に挑み続ける人であった。安吾の精神を具現し、さまざまな分野で挑戦し続けることにより、わたしたち日本人に喝を与えた個人または団体を表彰する「安吾賞」。挑戦者を応援する新潟市は、第2回の安吾賞受賞者として、アルピニスト野口健氏を選出した。



2008年 2/9 (土)

新潟市民芸術文化会館
 りゅーとぴあ・劇場
 12:30~15:15 <入場無料>

◆申込先／新潟市役所コールセンター (こたえてコール) TEL.025-243-4894 受付期間：1月13日~30日
 ※応募多数の場合抽選 ◆問い合わせ先／新潟市文化政策課 TEL.025-226-2563

新潟市

野口健

その突破力は極めて安吾的である。

高校の停学中に出会った故・植村直己の著書『青春を山に賭けて』が、落ちこぼれて社会との壁に突き当たり苦悩していた少年野口健を「夢」に駆り立てた。「そうだ! 自分を取り戻すために山に登ろう!」全くの登山初心者だった野口少年が、旧



ヨーロッパ大陸の最高峰モンブランに登頂したのは、わずか16才のときだった。

「7大陸の最高峰を最年少で登頂する」。そのとてつもない夢に向かって疾走するも、既成概念の壁、売名行為だという中傷、自身の甘さから生じる挫折と葛藤を幾度も味わい、その度に這い上がっていく生きざまこそが前人未到と言ってよい。

25才で7大陸最高峰を制覇した後も、エベレストや富士山など「清掃登山」の決行、「シェルパ基金」の設立や「環境学校」の開校など、現在も険しい挑戦者の道を歩き続けている。

その突破力は極めて安吾的であり、彼の破天荒な生きざまには安吾も舌を巻くに違いない。

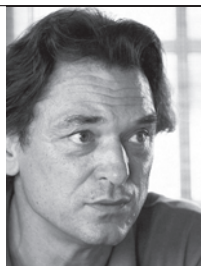


【野口健 (のぐち・けん)】

アルピニスト。1973年8月21日、アメリカ・ボストン生まれ。高校時代に故・植村直己氏の著書『青春を山に賭けて』に感銘を受け、登山を始める。1999年、エベレストの登頂に成功し、7大陸最高峰世界最年少登頂記録を25歳で樹立。2000年からはエベレストや富士山での清掃活動を開始。以後、全国の小中学生を主な対象とした「野口健・環境学校」を開校するなど積極的に環境問題へ取り組むほか、現在は、清掃活動に加え新たに地球温暖化に対する取り組みにも力を入れている。2007年12月に大分県にて開催された「アジア・太平洋水サミット」の運営委員として、「温暖化による氷河の融解」を取り上げる先導役を務めるとともに、各国元首級への呼びかけなど精力的に行った。主な著書に『確かに生きる~10代へのメッセージ~』(クリタ舎)、『あきらめないこと、それが冒険だ』(学習研究社)、第53回青少年読書感想文全国コンクール課題図書、『落ちこぼれてエベレスト』(集英社)などがある。公式ウェブサイト <http://www.noguchi-ken.com/>

新潟市特別賞

Karl Bengs (建築デザイナー) カール・ベンクス



古い民家を壊すことは文化を捨てることと同じ。

ベルリン生まれのカール・ベンクスさんが、築180年の古民家を再生して新潟県十日町市(旧東頸城郡松代町)に移り住んだのは1993年のこと。打ち捨てられ朽ちて行く古民家の中に、カールさんは自然環境に寄り添うような生活の知恵と、日本の職人たちの高度な技を発見し、「古い民家を壊すことは、宝石を捨てて砂利を拾っている」と警鐘を鳴らしてきた。古い民家をいつくしみ残していくことは、文

化を伝えると同時に世界に誇る職人の技術を伝えることでもある。遥か9,000kmかなたの国、ドイツからやってきたカール・ベンクスさんのマイスター魂が、忘れかけていた日本文化の再発見に導いてくれた。自ら新潟に居を構え、たくさんのメッセージを発信し続け、日本人に「喝」を入れる生き方は多分に安吾的である。

【カール・ベンクス】

建築デザイナー 1942年8月7日、ドイツ・ベルリン生まれ。Fresco (フレスコ)・家具職人の父の影響を受け日本文化に関心を持つ。ベルリン・パリで建築デザインオフィスに勤務しながら建造物・家具の復元・修復を学ぶ。1966年、空手を学ぶため日本大学に留学。以降建築デザイナーとしてヨーロッパをはじめ日本で活動。特に日本の古い家に強く惹かれていく。1981年、大工さんを連れてドイツへ。日本の寺院をデュセルドルフに移築する仕事に携わる。1993年、新潟県東頸城郡松代町(現十日町市)で、現在の自宅(双鶴庵)となる古民家の移築再生。2001年、新潟県「いしがた木の住まいコンクール」入賞。カール・ベンクス&アソシエイト 公式ウェブサイト <http://www.k-bengs.com/>

坂口安吾年譜



生誕 明治39年(1906)10月20日、新潟市に生まれる。学校に馴染まず、ひとり日本海に面する浜辺に寝ころんで思索した。荒蕪たる風と日本海の風景は安吾文学の原風景といえる。

余は偉大なる落伍者となっていつの日か歴史の中によみがえるであろう 大正11年、落第が決定的となり東京の豊山中学校3年に編入。この時、新潟中学校の机のふたに「余は偉大なる落伍者となっていつの日か歴史の中によみがえるであろう」と彫ったという。卒業後、下北沢の分教場の代用教員となり自然の中に悪童たちと遊んだ。この頃から求道の厳しさに対する憧れが強まる。

求道者、安吾 大正15年、東洋大学印度哲学倫理学科に入学。悟りを開くため多くの哲学宗教書を読破、睡眠4時間という厳しい修行生活を1年半続け神経衰弱に陥ったが、それを梵語、パリ語、チベット語、フランス語、ラテン語などを猛然と勉強することにより克服した。

文壇デビュー 昭和6年、『木枯の酒倉から』、『ふ

るさに寄する讃歌』、『風博士』を発表、文壇デビューを果たす。失恋の痛手を克服する決意のもと執筆した長編『吹雪物語』は酷評され、安吾は自分に絶望し、転居を繰り返し自らを孤独の淵に置きながら、どん底の淪落の生活を送る。しかし『紫大納言』(S15)、『木々の精、谷の精』(S15)などの新境地をひらく。

小菅刑務所・ドライアイス工場・軍艦に見いだす必然の美 昭和17年、国粹主義の時代、大胆な『日本文化私観』を発表し、伝統文化を鵜呑みにすることの欺瞞を指摘した。

墮ち切るにより真実の救いを発見せよ 昭和21年、敗戦後の昏迷の中でいち早く戦後の本質を洞察し、4月『墮落論』、6月に『白痴』を発表。この2編は、若者を中心に戦後虚脱していた日本人に強い衝撃を与えた。戦前戦中の倫理観を捨て新たな生き方を指し示す革命的宣言は希望の書となり、『墮落論』によって戦後の日本が再スタートした。昭和22年『風と光と二十の私と』、『桜の森の満開の下』、『不連続殺人事件』、『青鬼の禪を洗う女』を発表。

戦う安吾 昭和25年、『安吾巷談』を連載し、戦

後のタブーに挑戦する。昭和26年国税局と税金滞納、差押えをめぐって『負けラレマセン勝ツマデハ』を発表。税金闘争をひとり抜き、同年9月には競輪不正事件で自転車振興会を相手どり戦う。『夜長姫と耳男』(S27)発表。

急逝 昭和30年(1955)2月17日、古代史の雄大な構想とともに、原風景に由来する創造活動に意欲を燃やしはじめた矢先に、桐生の自宅で脳溢血で急逝した。享年48歳。

